

5 PCR(Polymerase Chain Reaction)法を用いた健常婦人子宮頸癌におけるHPV 16, 18型感染について

近畿大

斉藤淳子, 中谷宏行, 住吉道興, 福田武彦, 池田正典, 野田起一郎

〔目的〕ヒトパピローマウイルス(Human Papilloma Virus: HPV)16, 18型は子宮頸癌に高頻度に検出されている。しかし, 頸癌発生の自然史を解明するためには, 頸部に病変のない健常婦人におけるHPV 16, 18型感染を検索し, 追跡調査する事が必要である。今回, 我々はPCR(Polymerase Chain Reaction)法を用いて, 頸部擦過細胞DNA中のHPV 16, 18型の検出を行なった。〔方法〕頸部擦過細胞を採取後, DNAを抽出し, Vira-pap法にて, HPV感染を検索した。一方, 同一検体をPCR法にて, 特異的遺伝子を増幅した。PCR法は, HPV 16, 18型E₆領域のプライマーを用いて, 40サイクル増幅後, HPV 16, 18型E₆領域に特異的な³²Pでラベルしたoligomerを用いて, ドット・プロット法にて確認した。〔成績〕①Vira-pap法にてHPV感染陰性例87例中5例にHPV 16型を検出した。HPV 18型は検出されなかった。一方, Vira-pap陽性症例17例中HPV 16型9例, HPV 18型3例検出した。②頸部細胞診, 組織診にて異常を認めない健常婦人74例中7例にHPV 16型, 65例中2例にHPV 18型を検出した。〔結論〕HPV感染を検索する方法として, PCR法はVira-pap法と比較して感受性が高く, 簡便かつ特異的な方法である。このPCR法を用いて検討した結果, 健常婦人において, HPV 16型は9.5%(7/74), HPV 18型は3%(2/65)検出された。これらの症例を追跡調査することは, 頸癌発生の自然史を研究する上で重要である。

6 PCR(Polymerase Chain Reaction)法を用いた子宮頸部病変におけるHPV-DNAの検出

福岡大, 同第一病理*

江口冬樹, 馬渡秀仁, 菊池昌弘*, 白川光一

〔目的〕近年, 子宮頸部病変とヒトパピローマウイルス(HPV)との関係については多くの研究が行われてきている。今回我々は, retrospectiveな検索を目的として, ホルマリン固定切片よりDNAを抽出しPCR法を行いHPV-DNAの検出を行った。〔方法〕対象は1987年から1989年の間に生検を行った307例で, ホルマリン固定・パラフィン包埋の組織切片(厚さ約10 μ)数枚をそれぞれプロテアーゼK, フェノール・クロロホルム処理しDNAを抽出した。PrimerはHPV16型, 18型, 33型のE₆領域を含む20塩基の合成オリゴヌクレオチドで, PCR法は耐熱性DNA polymeraseを用いてDNA増幅を施行した。DNAの検出はHPV16型, 18型, 33型HPV-DNAプローブを用いたDot blot hybridizationにより検討した。〔成績〕307例のうち, HPV16は軽度異形成で15.4%(12/78), 中等度異形成で30.0%(15/50), 高度異形成で53.4%(31/58), 上皮内癌で44.4%(12/27), 浸潤癌で19.1%(18/94), 全体で28.7%(88/307), HPV18は軽度異形成で9.0%(7/78), 中等度異形成で10.0%(5/50), 高度異形成で17.2%(10/58), 上皮内癌で18.5%(5/27), 浸潤癌で22.3%(21/94), 全体で15.6%(48/307), HPV33は軽度異形成で5.1%(4/78), 中等度異形成で6.0%(3/50), 高度異形成で8.6%(5/58), 上皮内癌で7.4%(2/27), 浸潤癌で11.7%(11/94), 全体で8.1%(25/307)に検出した。〔結論〕今回のホルマリン固定切片を用いたHPV-DNAの検出率は, 新鮮材料を用いた従来の報告と同程度であった。ホルマリン固定組織標本を用いることでretrospectiveな検索が可能となり意義深い方法と考えられた。